

Shì zhě rú sī fū
逝者如斯夫

逝く者は斯くの如きか〈子罕第九〉

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

『論語』という書物は、一定の主張を順序だてて述べたものではなく、孔子やその弟子たちの言わば片言隻語を寄せ集めたものです。したがって、どういう状況で、どういう意図をもって語られたものか、必ずしもはっきりしません。そこから生じるのは、解釈の多様性です。過去二千年来、実に多くの人たちがこれに注釈を加えてきましたが、その解釈は人によって、また時代によって大きく異なります。その顕著な例を一つだけ取り上げてみましょう。

「子在川上曰：『逝者如斯夫！不舍昼夜』(Zǐ zài chuān shàng yuē: Shì zhě rú sī fū! Bù shě zhòu yè)」(子、川上せんじょうに在りて曰く「逝ゆく者は斯かくの如きか。昼夜ちゅうやを舍おかず」)〈子罕第九〉。孔子は川のほとりに立って言いました。歲月はこの川の流れのように去って行くのかなあ。昼も夜も留まることなく、と。「川上」とは川のほとりのことです。「逝」は行くという意味ですが、多くの場合、永遠に帰らないという意味に使います。「夫」は強めの助詞です。「舍」は「捨」と同じで、そのままに捨て置くという意味です。したがって「不舍」とは、そのままにして置かない、つまり絶えず流動してやまない、ということになります。孔子の言葉はこれだけです。前後の脈絡は全くありません。

孔子が川の流れを見て、いつになく強く心を動かされ、深い感慨を催したことは間違いありませんが、その感慨の内容については、何も語っていません。多用な解釈が生まれる所以はここにあります。

先ず魏晋南北朝時代の代表的な解釈を見ますと、次のようになっています。

①人は永遠に生きるわけではない。たとえ大きな

功績をあげたとしても、あつという間に時は過ぎ去ってしまう。この点については孔子も一般人も同じこと。川の流れに臨んで深い感慨を催すのは当然である。

②孔子は高い理想を掲げ、乱れた社会を正すために力を注いできたが、社会は一向に良くなならないまま、時は徒に過ぎていく。孔子はこの現状を嘆いている。

前者は世の無常を嘆いたもの、後者は世直しの困難さを嘆いたもの、ということが出来ますが、両者に共通するキーワードは「嘆き」です。日本では古くから「川上せんじょう之嘆」という四字熟語で親しまれてきました。ただ、孔子の思想に「無常観」はそぐわないと考える人も多いのではないのでしょうか。その点では、後者の方が納得しやすいようにも思われます。

さらにもう一つ、それは次のようなものです。

万物は絶え間なく変化し、止まることがない。これこそが宇宙の根本原理である。この原理は深遠なもので、なかなか理解しにくいですが、川の流れを眺めることによって、誰しも容易に身に感じ取ることができる。人は皆、特に学問に志す者は、この原理にのっとり、日夜奮励努力しなければならない。孔子は川の流れに譬えて、このように勤勉の尊さを教えている。これは宋代に流行した解釈です。いわゆる朱子学は、このような解釈がもとになっています。

以上三つの解釈のうちどれが正しいでしょうか。このほかにも多様な解釈が可能ですが、その答えは読む人の心の中に在るはずで

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)